

歓喜・歓東坑の護符

平成30年7月8日(日) 10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長坪井利一郎

1. はじめに

昔から鉱山の坑道のことを「まぶ」と呼んできた。辞書を引くと「間歩」と出て来る。石見銀山や佐渡金銀山などでは「間歩」と書いてきた。なのに、別子銅山の坑道は「間符」と書くのは、護符であるお札を貼っているからと聞いてきた。平成13年度に四ツ留の坑口に改修された歓喜・歓喜の坑口にお札箱が掲げられた。

また、昔から物の製造は生産要素の一つひとつが、超自然的な力が関わって生まれると考えられた。その力は、幸いを運んでくれたり危害を防いでくれたりする反面、禍をおこす恐ろしい魔物でもあったので、宗教と切っても切り離せない関係が生まれてきた。鉱山関係者はどうし神仏を祀ってきたのかを探ってみる。

2. 護符の記述

別子開坑二百五十年史話の28ページに坑口の護符について次のように記述している。「『別子立川、歓喜歓東当用舗内大略図』に、その間符口の結構が画かれ、向かって右、第一の柱に、天照皇大神、第二の柱に、八幡大菩薩、第三のそれに不動明王と書してあり、向かって左の柱、第一に春日大明神、第二に山神宮大山積大明神、第三に薬師如来と認めてある。」

住友別子鉱山史・別冊の15ページには「四ツ留と祭神」の図が出ている。

入口に向かって右手1 天照皇大神

2 八幡大菩薩

3 不動明王

入口に向かって左手1 春日大明神

2 山神宮大山積大明神

3 薬師如来

3. 物の存在、人の行為には、必ず理由がある

偶然にあるか 「柱上の神仏」

無意識にするか 「祀り」

<日常生活での例示>

例① 自彊舎は、鷲尾勘解治が青年労働者の勉学の間として別子山中に開設した。

鉱山の中心地の移動に伴って東平、角野新田、菊本町と場所を変えてきた。

別子銅山で働く若者の資質向上を目指し、別子銅山の発展の推進者になるこ

とにより別子銅山の発展を願った。

例② 自彊舎の講話会は、(財)自彊舎記念会が月次事業として定例開催してきた。

別子銅山を中心とした歴史・文化などを学習した。

別子銅山の繁栄と、銅山に係わる者としての幸福と安寧を、必然的に鉱山に関係する神仏にお願いしたと考える。

4. 神様の定義

- ①神 超能力を信仰上の対象として崇めたてられているもの。神社に祀られている神々がこれにあたる。
- ②霊魂 人が死んだ後、死体から遊離して不思議な呪力を持つと思われているもの。
- ③精霊 草・木などの生物や岩・山にどの無生物に宿る魂のこと。自然現象をみなすものもある。

5. 仏様の定義

紀元前5世紀に、北インドで生まれたシャカ族の王子のゴータマ・シッダールが悟りを開いた、ゴーマ・ブッダとなった人を漢訳の仏陀を略して仏と呼ぶ。仏陀が入滅した後の紀元前1世紀半ばころに仏像が製造された。併せて関係の像がつくられた。

- ①如来 最高位の仏。真実から来た者の訳
- ②菩薩 次期の如来候補。悟りを求める者の菩提薩埵の略。
- ③明王 如来の使者・化身。如来の教えに従わない救い難いものを救済する。
- ④天部 仏法の守護。仏教を守護する役割をもつもの。バラモン教やヒンズー教の神々を仏教に帰依した神々として取り込んだものが多い。

6. 護符の配列(人々の願い)

坑口の中から外に向かい左から右への順。

左1、右1、左2 三社託宣の神 皇室、貴族、武士の神の順、最高神を筆頭

右2 鉱山の守護神

左3、右3 仏教の病気平癒の明王と如来

神、仏の順(おおまかに在来の神、伝来の仏の順)。

山に関係の仏は、不動明王、薬師如来の順。

不動明王は修験道の本尊、修験道は我が国在来の山岳宗教と伝来の真言・天台仏教が融合。鉱山、薬草を探すのに修験者が関わっている。佐渡金銀山の発見でも修験者のかかわりが言われている。修験者は尾根を道としているので、別子銅山でも銅山峰を横断している露頭を見ていると考える。石鎚山から翠波峰にかけて石鎚権現信仰、雨乞祈願、龍の伝説等がある。

薬師信仰は飛鳥・奈良時代に広まった後、修験の霊峰になる山岳に薬師如来が

多く祀られた。

7. 三社託宣

伊勢（天皇の祖神）・春日（貴族の祖神）・八幡（武家の祖神）の3つの神の託宣を三尊形式にしるしたもの。元来は別々に唱えられていたものが、三尊形式にまとめられた起りは、応永年間（1288年～92年）に奈良東大寺東南院においてであろうと言われている。

護符や貼り札のような礼拝用として吉田神道の発展とともに室町時代から民間に流布する。吉田神道は室町幕府の八代将軍・足利義政の妻・日野富子の信任を受けて朝廷にまで影響力を及ぼした。そして江戸幕末まで神社界を支配した。伊勢神は正直を、八幡神は清浄を、春日神は慈悲を最要とすることをすすめ、3つの徳目は伊勢神宮、石清水八幡宮、春日大社で特に強調された。

天照皇大神宮(てんしょうこうたいじんぐ) 正直

謀計は眼前の利潤たりと雖も、必ず神明の罰に当る

正直は一旦の依怙えこにあらずと雖も、終には日月の憐あわれを蒙る

八幡大菩薩

清浄

鉄丸を食すると雖も、心穢じよくの人の物を受けず

銅焰えんに座すと雖も、心濁じよくの人の処に至らず

春日大明神

慈悲

千日の注連しめを曳くと雖も、邪見じよみの家に至らず

※千日は三日間。

重服深厚たりと雖も、慈悲の室に赴くべし

文殊院から二代目の友以夫妻への遺戒として三社託宣に対する信仰を諭している。ここにも、三社託宣の日常性が知れる。（「住友の歴史から」8ページ参照）

8. それぞれの神、仏

①天照皇大神

太陽を神格化した神。皇室の祖神の一つとされる。日本の神の中で最高神の位置を占める。高天原の主神となる。絶対神(怒り罰する神、守り叶える神)。

イザナギノミコトとイザナミノミコトの夫婦神が「国生み」で8つの島々を生んだ。淡路島、四国、隠岐島、九州、壱岐、対馬、佐渡島、本州である。次に、「神生み」で万物を生成して、農耕に適した肥沃な土地「豊葦原の瑞穂の国」を生んだ。イザナミミコトミコトが最後に火の神を生んだ直後に命を落とす。黄泉の国から帰ったイザナギノミコトが日向で禊をしたとき、左の目を洗ったらアマテラスオオミカミが、右の目をあらうとツキヨミノミコトが、鼻を洗うとスサノウノミコトが出現した。

アマテラスオオミカミは太陽の神であり、高天原を治め、ツキヨミノミコトは夜の世界を、スサノウノミコトは海を治めよと命じられる。

②春日大明神

神護景雲2年(768年)藤原不比等によって、常陸国・鹿島から藤原氏の氏神・武甕槌命(たけみかづち)を春日野に勧請して祀ったのが始まり。下総国・香取神の経津主命(ふつぬしのみこと)、天の岩屋で祝詞を奏上した祖神である枚岡神の天児屋根命(あめのこやねのみこと)を合祀し、その後、それぞれの斎主の比売神(ひめかみ)を合祀して4神を祀って氏神とする。

興福寺を氏寺とし、神仏習合のもと藤原氏の繁栄に伴って隆盛する。朝廷も重視し、武士、豪族も祭礼に参加するようになって次第に民衆の強い関心を引くようになる。何か事があった時に、進むべき道を指し示してくれる神として崇められ、江戸時代には各地に春日講も結成される。

③八幡大菩薩

神の依り代の旗がなびく様子から託宣を告げた新羅・加羅の神を5世紀ころに北九州に渡来した鍛冶、金属鑄造の技術集団の秦氏が持ち込み、銅採鉱をした香春山(かかわら)を神体としたのが原始八幡信仰。宇佐神宮の銅鏡を鑄造した。

八幡神の総本社は宇佐神宮である。宇佐地方の大神氏の氏神であったが、欽明天皇(509年)からの時代に、いろいろな奇端を表し、応神天皇の神霊とされて大和朝廷の守護神となる。神亀4年(727年)隼人の乱の征討に赴く。天平19年(747年)、奈良の大仏の建立の国家事業を「八幡神が天神地祇を従えて銅の湯を水とし、わが身を草木土に交えて大仏を鑄造しよう」とお告げをして助ける。鍍金の金不足も東北で金が取れると予告する。大仏殿の東の山中の二月堂、三月堂、四月堂の南に、平城京の鎮護の神として手向八幡に祀られる。神護景雲4年(770年)道鏡の皇位継承の野望を阻止する。純友・将門の乱で調伏が石清水八幡宮で祈願され、平定して国家鎮護の神として崇敬される。

鎌倉幕府が開かれると国家鎮守の神に石清水八幡宮から勧請して、鶴ヶ岡八幡宮として祀る。

④山神宮大山積大明神

天照大神の兄神。名前は偉大な山の神霊。そこから鉾山の守護神となる。水源や田の稔も支配するので、水の神、田の神としても信仰されてきた。別名を和多志大神で、海の神霊も兼ねている。

のちに火の神から生まれた山津見八神が出てくることから考えて、山に住む神が各地にあり、それらの山の精霊を総支配した神でもあったとも考えられる。

「伊予風土記」逸文の中には、仁徳天皇のころ、百済から渡来した神であるとされている。

⑤不動明王

仏の教えに従わない救い難い衆生を恐ろしい姿で威嚇、屈服、救済する五大明王の中心で、最も威力、興徳も大きい明王である。大日如来の命令でこの世の悪を断つ。悪を罰するだけでなく、修業する者を護る仏である。

如来、菩薩が「静」の仏に対して、明王は「動」の仏である。

不動明王の信仰が広まったきっかけは、平安時代初期の平の将門の乱。なかなか手に負えない平の将門を調伏するために京都の高尾山神護寺から不動明王像を借りて関東の成田の地で調伏の法を行った。京都に戻らずそのまま新勝寺の本尊になった。

そして、お不動さんを決定的に庶民に浸透させたのは、鎌倉末期の元寇。この時に敵国退散の呪法が各地でおこなわれ、その主役は不動明王だった。

また、庶民信仰の中では疫病退散の仏として信仰を集める。山伏が里人に頼まれて病氣治癒の加持の護摩を焚き、不動明王に祈った。憤怒の形相で悪魔を降伏させ、仏道に従わない者を無理やりにでも導き救済する半面、病を癒す治癒仏でもあるという二面性を持っている。現代でも病氣平癒を祈願するのは、薬師とお不動さんが多い。江戸時代まで庶民の信仰があつかった修験道は、明治の廃仏毀釈で信仰が断たれる。

青黒の肌色、軽装の装束はインドのカースト制度の最下層の奴隷である。行者に付き従いそれを守る存在である。不動明王としてよく知られているのに、大阪の法善寺横町にある「水掛不動」がある。正しくは、天竜山法善寺、西向不動明王。病氣平癒、商売繁盛、恋愛成就などでお参りが絶えない。

⑥薬師如来

薬師如来は西方極楽浄土の阿弥陀如来に対して東方浄瑠璃界の教主。その名のとおり医薬を司る仏で医王尊という別名もある。衆生の病気を治し安楽を与える仏である。

菩薩であったころ、12の大願を立て、その7番目の願いが「病のものも私の名前を聞けば患いがのぞかれる」とあって、これが薬師信仰の根拠とされている。阿弥陀如来が来世での安らぎを約束しているのに対して、薬師は現世での安らぎを求める点が異なっている。死後の不安に対する安寧の方が、「喉元過ぎれば」のたとえのごとく現世利益より強く、薬師より阿弥陀信仰の方が強い。

9. 簡単に整理する

- | | | |
|----------|-------|---|
| 入口から右手 1 | 天照皇大神 | (日本の最高神・太陽の神、皇室の祖神。) |
| 2 | 八幡大菩薩 | (古代の新羅系の技術集団の神、衆生救済と護国の神として大仏建立の時に日本の神祇をまとめて立つ。国家鎮守の神として崇められる。武士の祖神。) |
| 3 | 不動明王 | (大日如来の化身・大衆のあらゆる願いをかなえる。病氣平癒、心願成就) |

- 入口から左手 1 春日大明神 (本地仏は、釈迦如来・阿弥陀如来 極楽浄土へ招く。
鹿島・香取・枚岡の神を祭る。難局に出会った時に
切り開く力がある。貴族の祖神。)
- 2 山神宮大山積大明神 (山の神・鉾山の鎮護。)
- 3 薬師如来 (医王尊として心身の病を治す。)

日本人にとり、神と仏は日常生活の場において相通じて集団生活の不安を解消させ、
幸せを保障する有難い絶対者として信じられた。

10. 石見銀山の守護神

金山毘売神(かなやまひめのかみ)

イザナミノカミが火の神(カグツチノカミ)を生んだ時に嘔吐物から金山毘古命と
ともに生まれた神。嘔吐物の外観が鉾石を溶かした様に似ているところの連想から
鉾山の神とされている。鉾山資源の加工技術やその製品の守護神としても信仰を集
める。中国山地に発達した鉄製錬のタタラ系の鉾山の神と考える。

龍源寺間歩の古図で坑口を見ると四角の坑口で、四ツ留で化粧木は角材であるが護符は
ない。坑道の防御は力学的にどうしても柱を立てて桁を乗せる鳥居型になる。馬に乗った
まま入坑したという大久保間歩を現地で見ると直接岩肌を切り開いている。

11. 吉岡銅山の守護神

九州大学蔵の吉岡銅山の絵図「吹屋之図」の中の第6図「四ツ留の図」では、坑口の
絵に次のように書かれている。

四ツ留 左正面柱 天照皇大神宮
右正面 八幡大明神
左二本目 春日大明神
右二本目 稲荷大明神
左三本目 山神宮
右三本目 不動明王

三拾六本の矢来ハ 天の三拾六象祇形リ 三拾六童子を表ス 様式本の矢来ハ
薬師如来十二神明祇表さん

別子銅山の標記で書くと、向かって右、第一の柱に、天照皇大神宮、第二の柱に、春
日大明神、第三のそれに山神宮と書してあり、向かって左の柱、第一に八幡大明神、第
二に稲荷大明神、第三に不動明王となる。

入口に向かって右手1 天照皇大神 (天照皇大神)
2 春日大明神 (八幡大菩薩)
3 山神宮 (不動明王)

- 入口に向かって左手1 八幡大明神 (春日大明神)
2 稲荷大明神 (山神宮大山積大明神)
3 不動明王 (薬師如来) ()は別子銅山の位置

※稲荷信仰

和同4年(711)、京都盆地の開拓者の秦氏が伏見に祀ったに始まるという。総本山の伏見稲荷大社では、宇迦之御魂大神、佐田彦大神、大宮能売大神、田中大神、四大神の五座の神々を本殿に祀り、総称して稲荷五社大明神とする。東寺の建立をめぐって空海と結びつき、真言宗を介して朝廷で地位を高めていった。

稲の神であることから食物神の宇迦之御魂と同一視され、後に他の食物神も習合した。中世以降、工業、商業が盛んになると農業神から工業神、商業神、屋敷神など福德海運の万能の神とみなされるようになっていく。宇迦之御魂は食の神の意味から御食津神とも呼ばれ、三狐神の字を当てたところから狐が稲荷神の眷属とされるようになる。稲荷は神道系のほかに仏教系があり、荼吉尼天も狐を眷属とするので両者は同一と考えられるようになる。

稲荷信仰は福神信仰で万人の欲する「福」を与える。庶民の雑多な願いを七十七天王が分掌し、病氣平癒、交通安全、勝負必勝などオールマイティーに叶えてくれる。

古来より東南風をイナサと呼ぶ。イナサが転化してイナセと呼ばれているが、これがイナリに変化したとの考え方もある。五行説に当てはめると巽の風である。古い鉄山の言葉に「東南風は黒金も通す」という言い伝えがある。野タタラの自然通風依存時の神風信仰が元の考えがある。

なお、「吹屋之図」の中の第8図「間符中より水引揚之図」では「間符」とあり、第9図「間歩中より鉛石を負山図」では「間歩」とある。住友家が別子銅山を経営する前に吉岡銅山を経営していたので、坑口の呼称について「間歩」と「間符」がある吉岡銅山は、「間歩」から「間符」への移行期にあると言える

12. 日本金山廣細記

生野銀山の展示資料のケースの中に日本金山廣細記の写の巻物があった。インターネットで調べるが出てこない。

入り口の柱は向かって右が男柱天手雄命、左が女柱萬豊秋津姫命とあり、木火土金水を表すとある。陰陽五行説である。正面上には天照大神宮と金山彦命の2神を掲げている。歓喜坑だと大山積の神にあたる。

「四留柱押木笠木は鳥居を表す」とある。地表は土公神とある。四ツ留の「国構え」の上の一字の意味がつかめなかったが、鳥居で合点できた。正面の護符は鳥居の額であった。それで、吹屋の坑口の上の反り木も、住友別子鉱山史・別冊の15ページの「四ツ留と祭神」の図の形も鳥居でようやく読めた。

また笠木7本は、矢七本勸請とある。笠木の先が尖るっているのは「矢」の先をかたどっている。邪悪が坑口に入るのを迎え撃つ体形を表している。五色の御幣に五大力尊を鎮座させて幣払いをすることがあるように、歓喜坑の笠木等を五辺に尖らせているのは五大力尊の威力を借りているのか。

※ここでの笠木は矢木にあたる。鳥居の上の笠木(化粧木)とは異なる。

13. 金銀銅鉛山見分秘伝・坤

新居浜南高等学校ユネスコ部の別子銅山近代化産業遺産ガイドブックの制作をサポートしに行っていて教室で、九州大学工学部所蔵一鉦山・製錬関係史料の冊子を改めて見る。「金銀銅鉛山見分秘伝・坤」の中の四ツ留を記述した箇所を詳細に読む。

四ツ留に関して、入用木材の寸法、祝儀と清め、金格子、四ツ留の図等が記載されている。四ツ留入用木品の中の名称に「化粧木」があり、鳥居の笠木の部位の用材の名称である。尾去沢銅山住・内田慎吾の署名と印があるので、尾去沢の四ツ留と考えられる。

六柱に御神酒を祀り唱和する言葉が書かれている。

天照大神宮 天下泰平ト唱

春日大明神 国土安稔ト唱

八幡大神宮 困住氏運長久ト唱

※困は淵の古字

山神宮 当山繁昌山師心願成就ト唱

土神 岩内諸人延命ト唱

光神 土中息災繁昌ト唱

御幣を飾るのは

三社、山神、大日、稻荷、土神、光神とある。

六柱の原型は六神である。三社託宣の三神、山の神、土地の神、光の神である。別子銅山では土神が不動、光神が薬師へと仏教系の守護が入れ替わってきたと考えられる。

柱の配列で見るとは、別子と比べると春日と山神宮が入れ替わっている。

左り前柱 天照大神宮

右前面 山宮神

左り二番柱 八幡大明神

右二番柱 春日大明神

左り三番柱 土神

右三番柱 光神

14. 佐渡の釜の口四ツ留

釜の口とは四ツ棚工法でとめた主要坑道の坑口の呼び名である。坑口は山のふもとに近い山腹にあるので、なだれでふさがったりしないように3～4間、場所によっては5～6間を突出して補強する。まず左右に2本ずつ計4本の柱を立て、桁を渡して、坑の

左右の岩盤に細丸太を並べて差し込み、屋根にも細丸太を木口をそろえて並べる。さらに外側の上部や両側に石垣を積む。釜の口のことを化粧棚ともいい、祭壇扱いして正面に山岳神として祀られている「大山祇尊」と書いた額を掲げた。金山の安全と発展の願いとして祀られた。

祭壇として額を止めるために桁の下に柱で受けた棧を入れている。桁、棧、柱はあたかも鳥居そのものとなる。それで鳥居に神名の額を掲げる。入り口の柱は左右2本ずつ立てると4柱が立つので6神の意識はない。ゆえに柱に護符は掲げていない。

15. 歎喜坑の亀甲

上野誠の「大和三山の古代」（講談社現代新書）に藤原京建設で富本銭を埋めて地鎮まつりを行っていることが載っている。富本銭は円形に四角の穴があり、天円地方で天地の和合を表す。富本銭には上に富、下に本の字を配していて、左右に亀甲状に七曜が配されている。七曜は、日、月、火、水、木、金、土である。陰陽五行説に基づくものである。陰陽五行の調和のとれた天下泰平を象徴するものである。

歎喜坑には、六神仏を坑道の柱に祀る。天照、春日、八幡、大山積、不動、薬師である。坑夫が坑道に立つと坑夫の回りが六神仏で取り囲む。元は薬師を囲む12神将の形であった。坑夫を中心として富本銭の亀甲と同じ配置となる。坑道だから六角形が四角形に変形している。別子の山の土地神に対して、守護の六神仏に取り囲まれて坑夫が安全を請うている。五行は矢木の先の削り面の五面に留めている。

16. 守護神の構造

吉岡銅山では、入り口の六本の矢来形の柱は、元もとは薬師如来の十二神祇を表しているとする。 (十二神祇は十二神将) 柱の六神仏は入坑する坑夫を取り囲んで守る体形である。別子銅山で薬師如来に当たるものに稲荷大明神を当てている。坑道に入る安全性の確保を薬師如来の薬師如来に帰依している。そして、具体的に六本の柱に帰依している、薬師如来は視覚的には出てこない。十二神祇の省略した六神仏でもって陰で表現している。

別子銅山の坑口も、安全確保の帰依を六つの神仏に帰依し六本の柱に護符箱を掲げている。そして、別子銅山の繁栄の帰依としては大山積の神を勧請して帰依し、坑口の鳥居の型の中央の額の部分に一段と大きな護符箱を掲げている。帰依の二重性から大山積の神は二度出て来る。

17. 山内の神仏

天保10年の墨癡筆による別子山内図を見ると、天満宮、稲荷、金毘羅宮、祇園、龍王、地蔵が描かれている。稲荷信仰はすでに述べたが、他については簡単に記す。

なお、図内の舗方・下金場の下方に「ハカノハナ」とあるのは、位置からして杉本七助らを葬った蘭塔場であると思う。

天満宮	天満天神(菅原道真)を祀った神社の宮号。近世には寺子屋で菅公が祀られたことから学問の神として崇敬されるようになる。
金毘羅宮	ガンジス河に棲息する鰐が神格化されたヒンズー教の神。仏法の守護神として薬師十二神の一神となり、宮毘羅大将と称された。龍蛇で、蛇体であるところから海の神、航海の神として信仰されるようになった。
祇園	祇園は京都の八坂神社の旧称。牛頭天王・八王子宮・少将井の宮が祇園の神。基本的には疫病紙で、派手な祭りで疫病紙を地域外に送り出す。
龍王	仏教を守護するもの。密教では雨を祈る本尊。
地藏	釈尊の入滅後、弥勒仏が出生するまでの間、無仏の世界に住して六道の衆生を教化・救済する菩薩。平安時代に盛んに信仰される。

18. おわりに

別子銅山の護符が三社託宣から解読できたが、更に「吹屋之図」の中の第6図の「四ツ留の図」の読めなかった三行を読んだ時に護符の構造がにわかには判明した。第8図「間符中より水引揚之図」と第9図「間歩中より鉛石を負山図」で吉岡銅山が「間歩」から「間符」への移行期であることも判明した。

また、生野銀山の展示ケースの中から坑口の四ツ留の形が鳥居を表していることも判明し、潜在的問題意識が、あるキッカケで晴れ渡ってくるのが不思議である。

更に、新居浜南高等学校ユネスコ部の別子銅山近代化産業遺産ガイドブックの制作をサポートしていて、教室で「九州大学工学部所蔵一鉾山・製錬関係史料」の冊子を改めて見る。「金銀銅鉛山見分秘伝・坤」の中に四ツ留を記述した箇所があり、六柱には六神を表していたのも判明した。ダビデの二重トライアングルも浮かんでくる。もう一冊、「図説・佐渡金山」を見る。坑口は鳥居の形をして山の神として大山祇尊を掲げて祭壇としている。

「大和三山の古代」と鉾山とは関係ない本を読んでいると、藤原京建設の地鎮祭に富本銭を埋めている。富本銭の亀甲が清めでもあり、6柱6神と読める。縁は異なるものであることをつくづく実感する。

※後日、住友史料館の「四ツ留めと祭神」の図のコピーと末岡照啓さんの絵図中の文字の解説文を入手する。解明したとした鳥居は記述されていた。まさに灯台元暗師であった。

絵図中の文 間符□ 四ツ留 結様 □伝候
 四ツ留め 恰好^{かつこう} 並合^{なみあい}と申^{ます}ハ 先 高サ壱間二 幅壱間 之時ハ
 上^{うえ}二而^{にて} 六寸六歩 セバメル事 □伝の由 承り候
 三方ノ 三拾六の矢を 表三拾六^{たてり}童 ト 申し候
 此の矢 拾二本を 十二ノミサキ ト 申し候
 此木 カツラヲ木 ト 申し候

此木 化粧木 表の 鳥居 ト 申し候
 此内に カクシ矢 ト イフ
 右 鋪中 仕替 口伝 数多 有 候ヘトモ
 爰ニ 略仕候 此四ツ留之 仕替ヲ 戸隠之結び と申候

参考文献

日本の神様読み解き事典	川口謙二・編著	柏書房
日本の神さま事典	三橋健、白山芳太郎・編著	大法輪閣
神社と古代王権祭祀	大和岩雄・著	白水社
日本の神々	谷川健一	白水社
総図解よくわかる日本の神社	渋谷申博	新人物往来社
諸神・神名祭神辞典	矢部善三、千葉琢穂・編著	展望社
日本百名社歳時記	窪寺紘一	世界辞典刊行協会
神々の体系	上山春平	中公新書
続・神々の体系	上山春平	中公新書
八幡神と神仏習合	達日出典	講談社現代新書
八幡信仰	中野幡能	はなわ新書
神さまと神社	井上宏生	祥伝社新書
日本の神々と仏	岩井宏實	青春出版
国家神道	村上重良	岩波新書
古事記物語	鈴木三重吉	角川文庫
古事記の世界	川副武胤	教育社
日本人として知っておきたいお寺と神社 歴史の謎を探る会		河出書房新社
神と仏の間	和歌森太郎	講談社学術文庫
仏さまの履歴書	市川智康	水書房
不動明王	渡辺照宏	朝日選書
神と仏の出逢う国	鎌田東二	角川選書
神さま仏さま知ってるつもり事典	井澤忠夫	大泉書店
仏教用語の基礎知識	山折哲雄	角川選書
日常仏教語	岩本 裕	中公新書
印と真言の本	増田秀光・編集	学研
鉄から読む日本の歴史	窪田蔵郎	講談社学術文庫
九州大学工学部所蔵一鉦山・製錬関係史料 (吹屋之図、金銀銅鉛山見分秘伝書・坤)		九州大学
図説・佐渡金山		ゴールデン佐渡